

ビヤのアグア・プリエタ攻撃

パンチョ・ビヤはメキシコ革命の闘争を勝利に導くのは自分ではないことを既に自覚していた上、アメリカ政府がカランサ政権を正式に外交承認する噂を耳にしていた。それでも彼は起死回生を目指してソノラ州に向かった。出発時点でソノラ州は味方であるマイトレナの勢力下であり、カランサ軍僅か三千がアリゾナの国境の町アグア・プリエタに押し込められているだけであった。アグア・プリエタを粉砕したら、豊かな鉱山地帯を南下してマイトレナの部隊と合流し、さらに各地に散ったビヤ兵をソノラ州に集結させ、ハリスコからミチョアカンへ進出する考えであった。更にソノラはアメリカと長い国境線を共有していたので、牛を捕らえて武器と交換する事は容易だと考えた。

ソノラに向かったビヤ軍は、トレオンやサカテカスを圧倒した当時と比較し、見る影もなかった。最盛期の北部師団は五万人を誇っていたが、今は一万二千人、しかも連敗続きで食料、物資、弾薬の不足により兵士の士気はすっかり衰えていた。ある者は未だ意気盛んなビヤに従い、ある者は脱走による家族への報復を恐れていた。北部師団は数の上で縮小したばかりでなく、ビヤの下で戦ったジェネラルたちの殆どはいなくなっていた。アンヘレスはアメリカへ行ったきり帰ってこなかった。ウルピナは撃たれ、ロサリオ・エルナンデスはカランサ軍へ寝返り、トリピオ・オルテガはチフスで仆れていた。しかもビヤ軍はかつて経験したことのない厳しい自然条件と戦わなくてはならなかった。⁵

ビヤ軍兵士は鉄道で移動してきた。しかしチワワからソノラへ鉄道はなく、騎馬か徒歩以外に方法はなかった。シエラマドレー越えの道は長く困難を極め、途中殆ど水はなく、食料や物資を補給できる大きな農場に出会うことはなかった。荒野の中を谷から嶺へ、嶺から谷へと大砲を運ぶのは難儀で、脱走者が続出した。さらに兵士が不満であったのはソルダデラを伴っていなかったことである。彼等は初めてソルダデラ同伴を禁止され、彼女たちをカサス・グランデスに残してきた。困難な行軍を前にビヤが同伴を禁止した。ビヤは途中北部師団の中で最も忠誠を尽くした副官、屠殺者と呼ばれた男、ロドルフォ・フィエロを失った。馬が沼地に乗り入れ、馬ごと呑み込まれた彼の死を、北部師団の多くの兵は小躍りして喜んだ。

ビヤ軍が困難な行軍の末到達したアグア・プリエタの状況は、誰も予想しなかった厳しいものであった。カランサ軍は南のシナロアから海路ソノラ最大の港グアイマスに上陸していた。マイトレナがアメリカに逃亡したことで士気衰えた兵は抵抗すらせず、カランサ軍は易々と州都エルモシーヨに入っていた。ビヤはチワワに引き上げる事は出来ず、先に進むしかなかった。

アグア・プリエタではビヤと彼のジェネラルたちの想像を絶する事態になっていた。カランサは巧みな外交交渉を展開し、五千のカランサ軍を列車でイーグルパスからアグア・プリエタまで、アメリカ領内を運ぶ許可を求めた。ウイルソン大統領はカランサ政府を正

式に承認していなかったにも関わらず、10月14日、テキサス州知事の同意を得て、これを了承した。そして10月19日、カランサは終にアメリカ政府の承認を得た。⁶

カランサ軍は深い塹壕を掘り、鉄条網と機関銃で固めていた。ビヤはこれを知らず、得意の夜襲をかけ敵を圧倒しようと、11月1日の夜突入した。戦場はサーチライトに照らされ、ビヤ兵は機関銃やライフルの標的になり、倒れたビヤ兵は水を求めた。サーチライトはアメリカ側に設置されているとビヤは思った。国境のフェンスの向こう側に女たちが水の入ったバケツを持っていて、ビヤ兵がそこに群がった。その中にいたビヤは千人余りと予想していた守備隊が六千五百人に膨れ上がった理由を聞いて愕然とした。

偶々アリゾナ州ダグラスを視察していたジェネラル・フンストンはパンチョ・ビヤを見つけて、鉄条網越しに握手を交わした。そのときビヤはウイルソン大統領あてのメッセージとして「カランサ軍にアメリカ領土を使用させるようなことが再び起ったら、自分の領域に居るアメリカ人の生命は保証しない」とフンストンに言った。敗れたビヤは未だマイトレナ軍が握っていた町、四十キロ西にあるナコへ逃れた。この時からアメリカに対するビヤの態度はガラリと変わった。⁷

5. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P524

6. Ibid. P525

7. Ibid. P526